



ハロルド・ガーフィンケル・メモリアル・カンファレンスに出席して

樫村, 志郎

(Citation)

日本EMCA研究会ニューズレター:1-15

(Issue Date)

2012-02-23

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90006575>



ハロルド・ガーフィンケル・メモリアル・カンファレンスに出席して

樫村志郎

お断りとお願ひ

=====

本文は、当日のスライドの写真を参考にし、また録音を聞きつつまとめた。録音を許可した録音を提供して下さったヘリテッジ教授に感謝したい。聞き違い、思い違い、誤解も多いと思うが、すべての誤りは私の責任であることを記しておく。また、それぞれの報告の内容について本文に基づく引用を行うことは遠慮していただきたいと願う。各報告者の述べたことの正確な内容については、追って公表されると思われる著作等によってできるかぎり参照されることをお願いしたい。

=====

UCLA James West Alumni Center

1

2011年4月21日にロサンジェルスで亡くなったハロルド・ガーフィンケル(Harold Garfinkel)教授を追悼するカンファレンスが、2011年10月14日(金曜日)の晩と15日(土曜日)にわたり UCLA キャンパスで開催された。ガーフィンケル教授は1917年10月29日ニューアーク市生まれで、93歳であった。金曜日夜の会合は、ジェームズ・ウェスト校友会館1階の創立者の間で行われた。南向きガラス張りの大窓から緑が眺められる開放的な大広間である。午後5時前後からカリフォルニア大学の同僚、もと学生などの出席者が集まり始め、5時半ごろ、マニー・シェグロフ(Emanuel(Manny) Schegloff)教授の司会により開会が宣言された。アーリーン夫人(Mrs. Arlene Garfinkel)はガーフィンケル教授の甥というユージン・エルロッド(Eugene Elrod)氏(ワシントンDC弁護士)に同伴されて出席していた。シェグロフ教授からアーリーン夫人のお礼の言葉が伝達された。夫人は、生物化学の学位をもつ研究者であるとともに、公私にわたりガーフィンケル教授の生活と研究を支えてきた。本会では触れられなかったが、ガーフィンケル教授の最晩年には視力が衰えたというが、アーリーン夫人はかれのために本を読んできかせたというこ

とである。故メル・ポルナー (Mel Pollner) 教授のジュディ夫人 (Mrs. Judy Pollner) の姿も見られ、なつかしかった。シェグロフ教授は、本日の趣旨が、ガーフィンケル教授の教えを受けたり、親しく共同研究を行った人々により、かれの生活、人間、仕事を振り返ることであると述べた。多くの関係者のうち、エリック・リヴィングストン (Eric Livingston) 教授ほかに参加できない人がいるが、発言予定者のほかにダグ・マクベス (Doug Macbeth) 教授、ケン・リーバーマン (Ken Liberman) 教授は出席していることが言及された。シェグロフ教授は、さらに、ガーフィンケル教授の最初の学生の一人であり、ハロルドの死の直後に亡くなったイゴン・ビトナー (Egon Bittner) 教授、数年前に死去したラリー・ウィーダー (Larry Wieder) 教授ら、同時代的に研究を牽引してきた人々が亡くなったため出席がかなわないことに触れた。また、アルバート (ブリット)・ロビラード (Albert(Britt) Robillard) 教授とドン・ジンマーマン (Don Zimmerman) 教授が出席できないこと、そのかわりに2人からの手紙が読まれることを述べた。シェグロフ教授は、ガーフィンケル教授の業績を短時間で表現することは不可能であること、ただ社会学のみならず、人類学、言語学、心理学はもとより、哲学、精神医学、教育、法、物理学、科学史、中世語学と文学、にわたるその影響の広さは、会合の最後に紹介する予定の手紙類により、証明できるものだと述べた。

Alessandro Duranti

シェグロフ教授は、まず社会言語学者のアレッサンドロ・デュランティ (Alessandro Duranti) 社会科学科長を紹介した。言語人類学者でエスノメソドロジーに近い位置で研究を進め、『コンテキスト再考』をチャールズ・グッドウィン (Charles Goodwin) 教授と共編した人でもある。エリノア・オクス (Elinor Ochs) 教授の夫君でもある。かれは、社会諸科学が1954年にガーフィンケル教授が当時の社会学・人類学科の助教授として雇われたときと大きく異なっている理由の一つはまさにかれのような独創的な思想家たちの寄与により、社会やその研究の仕方やその見方が変わったからだと述べ、社会科学科の責務の一つは、ときに周囲に波紋をひきおこすこともある、そのような独創家の働きをいかに組織していくかにあると述べた。デュランティ教授は、ガーフィンケル教授が社会諸科学全般に与えた影響が深く大きなものであることを強調し、また、ガーフィンケル教授の人となりとして印象深いことは、かれが日常生活の詳細への執拗で深い関心をいつでも示したことだと述べた。

Mef Seeman

当夜の最初の公式の発言者は、UCLA 名誉教授の社会心理学者メフ・シーマン (Melvin(Mef) Seeman) 教授であった。シュエグロフ教授によれば、シーマン教授は、学科の同い年の同僚としてガーフィンケル教授を長年にわたりよく知っている人である。シーマン教授は、「音楽を聞いていない人から見るとダンスをする人たちは正気でないように見える」という言葉を引きながら、私は音楽を聞き Harold と長年ダンスをしてきたと述べた。シーマン教授は 1950 年代にオハイオ州立大学のリーダーシップ研究プログラムでガーフィンケル教授と出会った。シーマン教授は、Harold を理解しない人にはかれが謎に見えたというエピソードをいくつか紹介した。その一つでは、ガーフィンケル教授が科学研究に興味をもちある科学者のラボをシーマン教授のアレンジによって見学したさい、器具のクリーニングのような些細なあらゆることに驚きをもって接したために、ラボの教授は驚いたという。この教授は、ガーフィンケルの音楽を聞いていなかった—かれが何に興味をもっているのかについて全く知らなかった—のである。シーマン教授はまた、アメリカ空軍のスポンサーによって開かれたアルバカーキ会議の経験についても語り、最後に、教授が UCLA に移籍を考えていたとき、ガーフィンケル教授が「われわれのためにも君のためにも、ここにくるべきだ」と言い、それは正しかったと締めくくった。

次の発言者は、ガーフィンケル教授の残した膨大な遺稿類の編集者でもある、アン・ロールズ (Anne Rawls) 教授であった。彼女は、第 2 日の発言者としても予定されていた。当夜の発言のタイトルを決める際、エスノメソドロジー以前の Harold についてという示唆もあったが、彼女の検討している資料によれば、ガーフィンケル教授がエスノメソドロジーに対応するアイデアをもったのは、当初から、あるいは生まれながらそうであったとさえ思えると述べた。3 歳当時の写真には、かれのいつもの通りの外界を見るまなざしがあるという。資料箱は 600 箱、40 個以上のキャビネットがあるという。かれの未発表の研究は膨大かつ広汎なものであるという。たとえば、ジェローム・ブルーナー (Jerome S. Bruner) との 1940 年代の共同研究では、ガーフィンケルは情報統覚テストとよぶものを提案し 1946 年にその実施にかかわったという。ブルーナーとポストマン (Leo Postman) は 1949 年に「不整合の知覚」という論文を公表するが、ガーフィンケルの側では、1946 年から博士論文 (1952 年) をへて初期のその後の諸研究へとつながる系列があると理解できる。また、ガーフィンケル教授が 1950 年代のある時点で著名な 10 人ほどの法学者へのインタビュー研究を行っていた内容をソール・メンドロヴィッツ (Saul Mendrovitz) 教授が記述したものもあるという。パーソンズ (Talcott Parsons)、ガーフィンケル、ゴフマン

(Erving Goffman)、サックス (Harvey Sacks) の名前が書かれた合計 20 時間におよぶ録音テープもある。話題はパターン変数に関する議論のパーソンズによる改訂に関するものらしい。また、ロールズ教授は、とりわけ、ガーフィンケル教授の業績が一般に誤解されていることとは異なり、初期から社会正義に関するテーマを多く含むものであり、とりわけ研究姿勢も含めてマージナリティへの関心が重視されてもいたということを強調した。おそらくこれらの内容は将来にわたって公表されていくことで、ガーフィンケル教授の影響力の深化と拡大を促すものであらうと思われた。

Manny Schegloff

つぎに、シュエグロフ教授は、2 人の古いもと学生からの手紙を読んだ。一人目は、アルバート (ブリット)・ロビラード教授であり、「ハロルド・ガーフィンケル教師であり親友 ("Harold Garfinkel: A Teacher and Deep Friend) 」と題された手紙であった。そこでは、ロビラード教授がいかにして医療社会学の道へとガーフィンケル教授により導かれたか、ハワイへのガーフィンケル教授の訪問と滞在を皆がどう楽しんだか、ロビラード教授の ALS 発病に際していかに親切的な支援を与えてくれたかが記述されていた。つぎにドン・ジンマーマン教授の手紙が読まれた。そこでは、ジンマーマン教授が UCLA の大学院学生であった際にラリー・ウィーダー教授と同じ研究室をあたえられたことを通じていかにガーフィンケル教授を知るにいたったか、刺激的であり苦しくもある大学院時の経験とその後の会話分析研究への展開、アメリカ社会学会でのガーフィンケル教授の受賞スピーチの思い出などが記されていた。

Mike Lynch

3 人目の発言者は、やはりガーフィンケル教授のもと学生であり、多くの科学のワーク研究における共同研究者でもあるマイケル (マイク)・リンチ (Michael(Mike) Lynch) 教授であった。リンチ教授は、UCアーバイン校の学生であったとき、ガーフィンケル教授に出会った。リンチ教授は、ガーフィンケル教授がきわめて学問と教育において情熱とエネルギーをもっていたことが、その話が理解しにくかったとしても、特筆すべきことであり、

また、教授の教師としての寛大さに触れ、学生として自分の考えや草稿を提出した際に教授自身の言葉で再表現されることを聞くことが、予想外でもあるが刺激的な経験だったと述べた。また、リンチ教授も口真似を交えつついくつかのエピソードを紹介した。その一つでは、リンチ教授や当時の学生たちがガーフィンケル教授にエスノメソドロジー用語集 (glossary) を作ってはどうかと提案したところ、まずシボレス (Shibboleth) (合い言葉・符丁) から始めて用語集へと進んでゆけばよいとアドバイスを受けたが、まずシボレスとは何かを調べなければならなかったという。

Stacy Burns

4 番目の発言者は、法学をおさめたのちエスノメソドロジーへと進んだスティシー・バーンズ (Stacy Burns) 教授であった。彼女は、ガーフィンケル教授が社会学とその関連分野に対して決定的で革命的な影響を与えたことを指摘し、多くの同行ないし後続の研究者の研究とキャリアに多大な影響を与えたこと、その教育方法はユニークで禅の師匠のように謎めき真剣であり、かれのみが用いる用語や概念がひとつひとつ徹底的に新規なものの捉え方を体現していたこと、を述べた。UCLA の大学院教育の一例として、彼女は「上下反転マスク」―当時はプリズムレンズを組み込んだゴミバケツが用いられていた―を使用する実験について述べた。上下反転レンズは、水道蛇口からコップに水を汲むというような見慣れた課題を達成するための視覚的かつ身体的に特定のワークを観察可能にするものであった。あるいは、黒板に書かれる要約や講義ノートのような日常的ノーツの基礎をなす資源その他の特性を調べてキャンパスを調べ回ることもあった。これらのノーツは講義についての構築的分析を可能にするが、講義の独特の内容や主題的組織その他の特徴的詳細を回復するには無益であった。列の研究、案内図の研究にも言及された。これらは、もっとも通常のものごとの局所的秩序性に触れるという効果をもたらした。彼女自身は、会話分析とエスノグラフィックなワーク研究のうち後者に自己の研究を位置づけており、とりわけワークプレースのハイブリッド研究とよばれる専門職的ワークの研究では、研究者がその専門職の能力を有することが求められる (いわゆる独特適合性の要請 (the unique adequacy requirement))。それは、研究者が、その特殊なドメインにおけるワークの産出ないし再産出作業を行うことができないからであり、リンチ、リヴィングストン、ロビラーらの研究はそうした要請に適合しようとしており、自分のケースではハロルドの助言により自分が弁護士になり弁護士の仕事をすることが要請されたのだと述べた。さらに、彼女はその結果として法社会学的関心を育むことができ、彼女自身のその後

のキャリアを形成することにもなった。これはエスノメソドロジー研究の真剣さの極端とも言えない証しであるとともに、ガーフィンケル教授の影響の全人的広がりを示すものと思われる。

Doug Maynard

5 人目の発言者は、ダグ・メイナード教授であった。メイナード教授は、航空工学のエンジニアであった自分が南カリフォルニア大学の MBA コースに派遣され、それをきっかけに、ロングビーチの UCLA のエクステンションの社会学講義を聴講し始め、シンボリックインタラクショニズムを経て、自分が本当に好きになることのできる研究としてのエスノメソドロジーに出会うことになったと述べた。メイナード教授は UC サンタバーバラの大学院に入学する前に、ガーフィンケルの『エスノメソドロジー研究』をノートを取りながらはじめて最後まで読み刺激をうけながら理解できずに後にも何度も読み返したこと、ジャック・ダグラス編『日常生活の理解』が役立ったこと、サンタバーバラでは幸運にもラリー・ウィーダー、会話分析へと動きつつあったドン・ジンマーマンがエスノメソドロジーの手引きをしてくれたこと、ハロルドにはかれの引退後まで会ったことがなかったが、サンフランシスコの ASA 大会でかれをウィスコンシンに招待したことを述べた。1989 年はじめてガーフィンケル教授がウィスコンシンを名誉講師として訪れたときの印象深いエピソードを語った。(その骨子はメイナード教授によって公表されているのでそちらを参照してほしい。Douglas W. Maynard (1996), Introduction of Harold Garfinkel for the Cooley-Mead Award. *Social Psychology Quarterly*, Vol. 59, No. 1, 1-4, at 3)。それは日常世界の詳細に対するガーフィンケル教授の寛大で無私の広汎で深い関心を示すエピソードであり、当夜において数多く語られた同趣旨のエピソードの一つである。

Arlene Garfinkel

最後に、シェグロフ教授が、1980 年に学科長になったとき、シーマン学科長以来の懸案となっていた、ガーフィンケル教授の特別教授地位 (a distinguished professorship) への昇進に挑戦し成功したことを述べた。リンチ教授、シーマン教授らが述べたようにガーフィンケル教授自身はこの昇進問題に興味を示さず、むしろ自己の進行中の研究や草稿などを開示することを好まなかったという。シェグロフ教授は、社会学、言語学、心理学はもちろん、物理学、法学、歴史学、哲学等の最高級研究者に評価を依頼することにして、教授のそれぞれの分野での業績を評価してもらうという手段をとった。シェグロフ教授は、13 の分野における最高級とみなされる研究者による、31 年前の手紙の関連部分を朗読した。読み上げられた手紙からは、ガーフィンケル教授の仕事の革命的なインパクト、徹底性、

オリジナリティについて、最大級の評価が各分野で例外なく行われていることが示された。

第1日目の会合は、これをもって終了した。

2

Anthropology Reading Room UCLA

第2日のカンファレンスは、社会学科と人類学科が置かれている、ヘインズホールの4階人類学科読書室で朝9時から夕刻まで、第1日の報告者3名を含む8名の報告を中心に行われた。本日のカンファレンスは、第1日からやや焦点を移して、ガーフィンケル教授の学問的達成とその遺産を、さまざまな分野にわたって論じようとするものであった。アーリーン夫人とエルロッド氏は午後半ばまで出席されていた。第2日目の司会者は、ジョン・ヘリテッジ (John Heritage) 教授とシェグロフ教授が交替でつとめた。

John Heritage

はじめに、ヘリテッジ教授が開会を宣言し、カンファレンスを支援した UCLA の社会科学部への謝辞などが述べられた。つぎにヘリテッジ教授自身の短い報告として「社会的世界の構成—ハロルド・ガーフィンケルとかれの遺産 (Constituting the Social World: Harold Garfinkel and His Legacy)」が行われた。ヘリテッジ教授は1970年代にエスノメソドロジーを知ることになったが、その際のきっかけの一つは、ガーフィンケル教授の博士論文があるシンボリックインタラクショニズムの論文で参照されていたことであった。ガーフィンケル教授の博士論文では、社会理論の構築における「前理論的」決定のリストが掲げられ、それを手引きとしてパーソンズとシュッツの理論が比較される。期待破棄実験が用いられ、社会秩序問題が追求される。こうした論考はまったく新しいものと感じられたとヘリテッジ教授は述べた。また、後の『エスノメソドロジー研究』(1967年)においては、

博士論文における現象学的用語法が表面には見られないこと、また、1940年代の「カラートラブル」("Color Trouble" 1940年)「人種間および人種内殺人」論文("Research Note on Inter-and Intra-Racial Homicides" 1949年)における社会正義問題への関心の存在と『エスノメソドロギー研究』におけるセックスとジェンダー問題への寄与に言及し、これらの関心がどこから由来したのかを記憶しておく必要があるとともに、ロールズ教授の研究への期待がもたれること、若いガーフィンケルはフッサールの『危機』書とともに科学の無料力さへの問題意識をもっていたと思われることなどに触れた。

Anne Rawls

つぎにアン・ロールズ教授が新旧のいくつかの写真を示しながら「初期時代 1939-1952 年—ノースカロライナ、ハーバード、プリンストンのガーフィンケル (The Early Years 1939-1952: Garfinkel at North Carolina, Harvard and Princeton)」とのタイトルで報告を行った。彼女によれば、大きなインパクトをもった1967年の『エスノメソドロギー研究』の出版に先立ち、ガーフィンケル教授はすでに膨大な研究を行っておりその多くが未公表のままになっている。ノースカロライナ時代の研究はあきらかに社会正義の諸問題に焦点をあてており、ハーバード時代の研究も人種間不平等、デモクラシー、ジェンダー、宗教的カテゴリー化などの論点をめぐるものであり、期待の相互性の違反という現象などを通じ社会の理論的理解に対して深い含意をもつものであった。また、彼女は、ガーフィンケルの社会学的関心が第2次世界大戦前ないし戦中に由来するものだという推測を述べた。これらの理解は、たとえば彼女の編集になるガーフィンケルの『情報の社会学理論へ向け』(Toward a Sociological Theory of Information)ほかの近著の序論類において論題に即して詳細に述べられているものでもある。本報告では、ガーフィンケルの初期時代(22歳から35歳の頃)を、戦争と社会科学の学際的かつ学問内的な変革期と重ね合わせ、ガーフィンケルの学問の形成をそのなかで理解する鳥瞰的な説明が行われた。こうした観点から、プリンストン、ハーバード時代のパーソンズ、サックス、ゴフマン、ガーフィンケルの交流とその他の社会および人間諸科学の変革者たち(ハーバート・サイモン(Herbert Simon)、ケネス・パーク(Kenneth Burke)、ジェローム・ブルーナーら多数の人々)からガーフィンケルが得た影響とそれらのグループを介しての各分野の学問へのガーフィンケルの影響ないし両者の相克と社会科学へのガーフィンケルの批判的立場の強まりなどの関係が重要になり、またとりわけアメリカ南部に分類されるノースカロライナ時代をはじめとして少数派である上昇志向のユダヤ人としてのかれのアイデンティティとの関連も注目されてくるという。1939年ノースカロライナの大学院に入学したガーフィンケルは1939年のASA大会におけるサザーランドの「ホワイトカラー犯罪」の議論とその社会的含意および科学

概念との関わりに問題を感じたというが、こうした感受性がかれのその後の研究にはつきりとした影響をもっていると示唆される。1940年にはかれは「カラートラブル」を人種問題の社会学的文学活動に力をいれる全米都市同盟 (National Urban League: 黒人の地位と権利の向上を目指す組織の一つ) の出版する『オポチュニティ』誌に投稿する。周知のように、それは社会志向性をもつあるアンソロジーに著名作家にならんで収録されるという成功をおさめた。第2の出版物である「人種間および人種内の殺人」論文もまた、社会正義の論点と社会学的方法論の欠陥をつくものであった。かれはプリンストンで犯罪学の講義を行い、マイノリティ (ユダヤ人、黒人、共産主義者、犯罪者等等) への関心を持続けた。ハーバードではパーソンズの理論の発展に協力した。その後 1961 年頃に書かれた『エスノメソドロジー研究』の草稿では、1967 年の内容の前に「第1章文化の発見 (the Discovery of Culture)」と題されたページが含まれている。そこでは、エスノメソドロジーの対象が文化という用語で指示されていること、その他多くの興味深い論点がとりあげられ、その含意の広さと深さが示唆された。

Randall Collins

土曜日午前の3人目の発言者は、アメリカ社会学会会長でもある、ランドール・コリンズ (Randall Collins) 教授であった。コリンズ教授の報告は「ガーフィンケルと20世紀社会学および人間諸科学の大転換—アメリカからの見解 (Garfinkel and the Great Turn in Late 20th Century Sociology and the Human Sciences: An American view.)」と題された。コリンズ教授によれば、20世紀における社会学および人間諸科学の大転換には、アメリカを中心としてみると、2つの時点がある。最初のものは、1920年から30年代に生じた。ここにおいては、ヨーロッパの新カント主義とイギリスのパークリーらの哲学という観念論の支配から、論理実証主義、ウィトゲンシュタイン哲学、日常言語哲学、現象学の対抗的成長が見られたが、それらの全体は、意味と対象、表現できないものの位置、世界構築の恣意性、外界認識の主観性等の主要な知的課題の再問題化と諸解決をめぐる生じたが、ガーフィンケルの学問的企図は、ウィトゲンシュタインを引き継ぐものというよりは、より直接的にはむしろシュッツ、ハイデガーを経由する実存主義的現象学に定位していたとする。たとえば、期待破棄実験は、世界構築の恣意性、現存在の被投性と死すべき必然性、実存的不安を明らかにするものと理解できる。第2のものは1960年から70年代に生じた。

カウンターカルチャー、反科学、マルクシズムの再生、言語学における形式主義と構造主義言語学、フーコーの構造主義、実存主義、論理実証主義、日常言語哲学の相克のなかで、ガーフィンケルは複数の潮流を結合し、よりマイクロな日常的詳細の経験的研究を生み出したと解釈できると述べた。

本報告の後、休憩がとられた。これらの3報告は、ガーフィンケル教授の学問の起源と背景を主にとりあげて論じたものと言える。本日の残りの報告は、これに対して、さまざまな研究分野におけるガーフィンケル教授のインパクトを論じ、あるいは示すものであった。

Iddo Tavory

休憩後の一人目の報告者は、イド・タヴォリ (Iddo Tavory) 博士であった。タヴォリ博士は「オッカムの剃刀とガーフィンケルの棍棒: エスノグラフィーへの打撃 ("Occam's Razor and Garfinkel's Bludgeon, With Some Repercussions for Ethnography) 」と題した報告を行った。本報告では、エスノメソドロジーに刺激されるエスノグラファーは、いかにして事例の一般的理解を得ることができるかという問題が考察された。タヴォリ博士によれば、エスノグラファーは、あるエスノメソドロジカルな秩序が複数事例に共通して見られるというパターンを示すことができ、また、制度的会話分析において注目される制度場面における場面特有的な現象に注目することもできるという。本報告の残りの部分では、このようなエスノメソドロジカルなエスノグラフィーのあり方が、いくつかの研究事例を通じて例証された。ひきつづくディスカッションにおけるロールズ教授、ヘリテッジ教授によるコメントも有意義であった。

Lucy Suchman

つぎは、ルーシー・サッチマン (Lucy Suchman) 教授による「物事は絶望的なまでに受肉化せよーワークプレース研究のハイブリッドなイメージ (Let the thing be hopelessly embodied': the hybrid imaginary of workplace studies.)」という報告がなされた。サッチマン教授は、1970 年代から 90 年代にかけての、ゼロックス・パロアルト研究所における、エスノメソドロジーにもとづく彼女自身の研究やガーフィンケル教授との共同研究の経験を語った。ガーフィンケル教授は、機械やオフィスにかかわる知識、情報、事物の表現において、一般的形式的表現ではなく、つねに受肉化された物事から学ぶことを強調したこと、エスノメソドロジーに刺激された研究により研究に関する研究所自体の考えも変化したこと、彼女とガーフィンケル教授の経験はエスノメソドロジーが大学の外で追求され成果をあげる仕方の一つの好例となっていると考えられることなどを指摘した。また、サッチマン教授が保存しているガーフィンケル教授の研究会での発言も再生されたり、読み上げられた。

Candace West

昼食休憩の後、キャンディス・ウェスト (Candace West) 教授が「ガーフィンケル、セックス、ジェンダー (Garfinkel, Sex and Gender)」と題する報告を行った。ウェスト教授は、1970 年学生抗議行動に揺れる UCSB キャンパスでいかに『エスノメソドロジー研究』(ウィーダー教授の大学院講義はこの 1 冊のみがテキストであった)に出会い、「アグネス」の第 5 章の報告を行ったかについて、またその 1 章が自らの人生に決定的な影響をもったことを述べた。しかし、ジェンダー研究においてもっとも議論されたケースとなったアグネス自身が、精神医学、社会学、セックスとジェンダー研究、シンボリックインタラクショニズムを通じて、その後社会にもたらした変化はより甚大であった。セクシュアルな地位は、ガーフィンケルにより、はじめて当初から自然に、あるいはその他の仕方、正常的に性別化された人々が住まう、ノーマルな環境のもとでの達成とみなされた。この現象あるい

はそれに関連する現象に関する著述は、その後現在まで、フェミニズムのなかで盛んに行われている。ウェスト教授は、社会的役割を中心とするジェンダーの概念を構築し、自ら幼児期に性器傷害を負った子どもに新たな性を与える手術を成功させたと主張したジョン・マネー (John Money) の理論に言及し、マネーの理論が、ガーフィンケルが指摘する、性の本質的に男女のいずれかでしかありえないという想定に依存していたこと、そしてこの想定から、アメリカ社会がそこからの自由をもとめてきた、多くの生物的または社会的な性の概念が基盤づけられていることを指摘し、彼女自身やジンマーマン教授の仕事だけでなくいかにおおくのセックスとジェンダー研究がかれによって可能になったかと指摘した。活発な質疑が行われ、そのなかで、ウェスト教授は、性的ダイコトミーが疑問視されるに至った社会においても、アグネスの論文は、教育あるいは研究の観点から、重要性をもつ資料だと述べた。

Lorenza Mondada

つぎに、当時 UCLA に短期間滞在して研究中でもある、ロレンザ・モンダダ (Lorenza Mondada) 教授が「説明可能な行為の状況づけられかつ方法的な産出 (The situated and methodic production of accountable action)」と題する報告を行った。言語学者として、モンダダ教授は、ガーフィンケルの言語と行為の理論への寄与は、メンバーの自然言語の習熟 (ガーフィンケルとサックス「実践的行為の形式的構造」1970 年) という考え方から出発して考えることができるとし、言語へのそうした理解からは、自然言語の習熟した使用によりいかにしてアカウントビリティが産出されるか、そのための資源をどのように記述できるかが中心的な問題として提起されるとした。言語学はこのための資源として言語の (1) インデクシカルティおよびこのもの性 (ヘクシアティ haecceity) とその作用にみられる再帰性 (reflexivity) (2) 秩序性 (orderliness) とがいかにして言語作用において結合しているかを理解するという課題が価値があるとともに挑戦しがいのあるものだとして述べた。彼女自身のビデオ資料を用いた会話分析例を紹介し、第 1 の例の発見が第 2 例の発見を引き出すという方法により、2 つの側面が結合できると示唆し、ガーフィンケルによるつぎのような発言を再生し紹介した (これはダグ・マクベス教授により提供されたものという)。
"Getting access to one get you access to: (.) the more than one. Finding the one, .. it leads to seeing, that there can be indefinitely many others. You not yet saying that they are (all) instances of a class, you are not dealing with a class, you are dealing with a one and the way it provides what a next could be. You're not looking to

formulate the class, you're looking (.) with the- with each one, to find the wh- a next could be. ... In the way of working with them, they offer the instructive character of finding and recognizing..” (仮に訳せば、「ひとつのものの獲得は、・ ・ ・一つ以上のものへの獲得なのだ。・ ・ ・そのひとつを発見することは、無限に多くの他のものがありうるということの理解へと導くのだ。君はまだそれらがあるクラスの(すべての) 諸例なのだと言っているのではなく一君はクラスを扱っているのではない、ひとつのものとそれが次のものが何でありうるかを提供する仕方を扱っているのだ。・ ・ ・君はそのクラスを定式化しようとして見ているのではなく、君はそれぞれのものを見て、つぎにくるものが一体どんな(もの) かを見つけようとしているのだ。・ ・ ・それらを扱う作業の仕方のなかで、それらは(つぎのものを) 発見し認識するためのインストラクションとしての特徴を提供するのだ。」ということになるか。) モンダダ教授は、「それはそのものの豊かさのなかにつぎのものを探す生きた作業 (in vivo work of searching for a next one in its richness) なのだ」と要約した。これは、エスノメソドロジカルな研究においていかにしてパターンを発見するかというタヴォリ博士の報告とも連続するが、われわれの研究経験においてもしばしば問われる問題にかかわる。これに関して、第2のものを探すということとパターンを扱うこととの差異をハロルドがどうとらえていたかについてシェグロフ教授が質問をし、それに引き続きモンダダ教授、ロールズ教授、ヘリテッジ教授、デュランティ教授、マクベス教授によるディスカッションがなされた。聞き応えのあるやりとりであったと思う。

A slide by Doug Maynard

短時間の休憩のあと、ダグ・メイナード教授が『「サーヴェイ可能な社会」』についてのガーフィンケル―想像できないものを想像する ("Garfinkel on the 'Surveyable Society': Imagining the Unimaginable")』と題して報告を行った。本報告では、1990 年以来メイナード教授とサーヴェイ調査を専門とするノラ・シェイファー (Nora Schaeffer) 教授がガーフィンケル教授の助言をうけつつ行ったサーヴェイインタビューに対する調査の経験が、とりあげられた。修復的関心 (remedial intersts) がいかに回避されつつ問題が設定されたか、サーヴェイを「想像不可能な」(現実の実践) ものとみなすこと―しかしそのなかでガーフィンケル教授はしばしば(「怠惰な想像力を活性化する」ために) 驚くべき想像力を用いた―ことでいかなる知見が開けてきたか(これが副題の意味することである)、いかにガーフィンケル教授が社会の無数の場所で実行されるサーヴェイ行為を実践的合理的に社会的に達成するために設定される対象としての「サーヴェイ可能な」社会という概念を示

唆したかを紹介し、それらがサーヴェイにおいて「何が現実起こっているのか」の詳細で豊かな知見（たとえば "I would say" や "Let's say" という定式化、プローブ、質問・反応カテゴリーの諸作用）、サーヴェイ産業の活動装置としての実用的インストラクションとしてのサーヴェイとその方法論という現象などに導いたことを説明した。本報告は、社会調査という複合組織的事象について、エスノメソドロジーがいかにして、非修正的でありながら、徹底的に批判的な研究を可能にするかを考えるための好例でもあらうと思う。グッドウィン教授、ロールズ教授、リンチ教授を交えた質疑が続き、これも興味深いディスカッションであった。

A slide by Mike Lynch

最後のスピーカーはマイケル・リンチ教授であり、「科学と技術研究におけるガーフィנקルの寄与 ("Garfinkel's Contributions to Science and Technology Studies)"と題する報告を行った。リンチ教授は、ガーフィנקル教授の直接的な寄与（『エスノメソドロジー研究』に収録された合理性論文、パルサー論文、ガリレオ論文など）を指摘したのち、STS（科学と技術研究）の1970年以降の拡大の歴史を概観しつつ、今日においてはエスノメソドロジーへの参照はおおむねマージナルな地位にあるが、（1）コーディング実践、組織的な十分理由、その他の前データの実践や陪審推論についての研究が自然科学に容易に転用できること、（2）トピック／リソース区別、（3）エスノメソドロジカル無関心の規則、（4）不整合事象（トラブルなど）を用いる想像力活性化を利用する研究視角、（5）達成としての事物、（6）科学における「社会的」および「自然的」秩序の創造、（7）職業と科学（音楽なども含め）の社会学における「見失われた（相互行為的）対象 ("missing (interactional) what")」、（8）その他の方法論的トピックなどの諸論点や諸知見は、直接的な関連性がより見えにくいとしても、広くそれぞれガーフィנקル教授に由来する寄与（およびその可能性）と考えられていることを指摘した。リンチ教授はまたガーフィנקル教授が自然科学については構築的分析の語を適用しようとしなかったこと、その点で科学の社会構築主義に対して留保をもっていただと思われること、また、ボルナー、サドナウ (David Sudnow)、ジェファーソン (Gail Jefferson)、ウィーダー、ビットナーに記憶されるべき故人の人々の名をあげて科学研究へのその寄与やその寄与可能性を論じることなどに触れた。最後に、リンチ教授は、故ボルナー教授の著名な論文 "Left of Ethnomethodology" (1991年)の「エスノメソドロジー研究は社会科学の郊外に安住するようになった」との指摘に触れ、それは郊外から墓場に行こうとしているのかと問いながら、希望は残されていると述べた。

Harold Garfinkel

3

すでに長文になったが、簡単な感想を付け加えたい。第2日のカンファレンスは、エスノメソドロジーの起源を問題にする報告と、種々の分野におけるその展開をとりあげる研究に分類できる。後者にそくしては、今日エスノメソドロジーはさまざまな研究分野へとインパクトを広げ、多くのエスノメソドロジー研究（会話分析研究を含む）は、種々の実践的活動分野におけるハイブリッドな研究ととして行われている。すでにガーフィンケル教授の『エスノメソドロジー研究』が種々の実践分野における活動研究の集成であることからわかるように、実践的活動のなかで研究が行われることはエスノメソドロジーのユニークな性質である。そしてエスノメソドロジー研究者にとって不可避の問題の一つは、エスノメソドロジーの本質的特徴がある種の方法論的ラディカリズムにあり、この視角を実践分野において生かしていく際、各実践分野の関心に迎合することの危険性に対して敏感にならざるをえないことである。本日のカンファレンスは、はからずもこうした問題の存在、その性質、それへの対応、また、その生産的な利用についてあらためて考えさせられるものである。他方、多数の分野を通じて、今日においても、エスノメソドロジーの諸研究とそこに含まれる独特のラディカリズムにはかなり一貫性が見られるのであって、それは、エスノメソドロジーの構想が20世紀の社会研究の本質的問題への独特のアプローチとその解決の試みの一部をなしている—バーソンズを通じて、科学の基礎付けや統一化の試みを共有するものとしても理解できる—ことを、前者に属する本日の報告とともに、示唆するものと思う。

(2012年1月11日)

Back to Welcome